武蔵野日曜集会

神殿を毀せ、三日で建てる
――ヨハネ伝第2章12～25節――

１９６７年８月６日（武蔵野）
小池辰雄

火性と水性　過越の祭　犠牲の血　永遠の贖罪を終えた　妬みの神　神の怒　神の為には狂えるが如く　神殿を壊せ、三日で建てるぞ　無の教会　私たちは神の生ける宮　御霊が入ってきてこそ自由になる　無私の召団　我々は既にキリストの復活体　御霊の権威

【ヨハネ2・12～25】

12 この後イエス及びその母・兄弟・弟子たちカペナウムに下りて、そこに
数日留りたり。
13 斯てユダヤ人の過越の祭ちかづきたれば、イエス、エルサレムに上り給う。
14 宮の内に牛・羊・鴿を売るもの、両替する者の坐するを見て、15 縄を鞭に
つくり、羊をも牛をもみな宮より逐い出し、両替する者の金を散し、その台
を倒し、16 鴿をうる者に言い給う『これらの物を此処より取り去れ、わが父
の家を商売の家とすな』17 弟子たち『なんじの家をおもう熱心われを食わん』
と録されたるを憶い出せり。18 ここにユダヤ人こたえてイエスに言う『なん
じ此等の事をなすからには、我らに何の徴を示すか』19 答えて言い給う『な
んじら此の宮をこぼて、われ三日の間に之を起こさん』20 ユダヤ人いう『こ
の宮を建つるには四十六年を経たり、なんじは三日のうちに之を起すか』
21 これはイエス己が体の宮をさして言い給えるなり。22 然れば死人の中より
甦えり給いしのち、弟子たち斯く言い給いしことを憶い出して聖書とイエス
の言い給いし言とを信じたり。
23 過越のまつりの間、イエス、エルサレムに在すほどに、多くの人々その
為し給える徴を見て御名を信じたり。24 然れどイエス己を彼らに任せ給わざ
りき。それは凡ての人を知り、25 また人の衷にある事を知りたまえば、人に
就きて証する者を要せざる故なり。

●火性と水性

いわゆる「宮清め」というところですが、同じ並行記事がマルコ伝11章15節から17節にあるので、まずそちらの方を読んでおきましょう。マルコ伝の方は、キリストがベタニヤ

のあたりを根拠として最後にエルサレムにのぼられ、やがて十字架の死を遂げられる伝道の終末の方にあたっての出来事ですが、ヨハネ伝の方はむしろ伝道の最初の方に出ている。記事のうえでは、時間的には矛盾をきたしているような記事です。マルコ伝11章15節、

「15**彼らエルサレムに到る。**

即ち、イエスと一緒に北のガリラヤからずっとヨルダン沿いにやってきて、エリコあたりを渡ってエルサレムに入ろうという一群の人々が「彼ら」ですが、

イエス宮に入り、その内にて売買する者どもを逐い出し、両替する者の台、鴿を売るものの腰掛を倒し、16また器物を持ちて宮の内を過ぐることを免し給わず。17かつ教えて言い給う『「わが家は、もろもろの国人の祈の家と称えらるべし」と録されたるにあらずや、然るに汝らは之を「強盗の巣」となせり』

18祭司長・学者ら之を聞き、如何にしてかイエスを亡ぼさんと謀る、それは群衆みな其の教に驚きたれば、彼を懼れしなり。」（マルコ11・15～18）

マルコ伝式に非常に簡潔に書いてあります。

「わが家は、もろもろの国人の祈の家と称えらるべし」

という旧約の言葉はイザヤ書56章7節に出てくる言葉です。要するに、神殿は祈りの家である。旧約聖書で「詩篇」というのは本来は「祈り」という字です。ところが、これを「強盗の巣となしている」と。勝手にむさぼって人の物を盗ろうとする。いや実に、神のものを私して宗教的な商売をしようとする。よく世の中の宗教には商売的な宗教がある。この場合、このユダヤ教もかなりその弊害に陥っていて、とんでもないというわけです。

イエスというかたは大体、その行動がそう烈しいことはなさらないようですが、実は彼の行動も言葉も、言も行も本質的にはもともと烈しいんです。キリストというと、

「自分は柔和なる者にして」

とイエス自身も言われたので、なにか非常に優しい温和な人だと思う。それは確かにそういう面はあるでしょう。けれども、キリストは実は――この頃は非常に烈しい夏ですが――この夏のように烈しい。大体、偉大な人というものは烈しい性格を持っている。ドイツ語で「フォイゲルナトゥア」と言いますが、

「ベートーベンは火の如き性格の人であった」

という。火のような――「火性」という言葉はないけれども――火性というようなものを持っている。大体、生きとし生けるものは太陽という驚くべき火性によって生きているではないですか。我々がこうやって生きているのも、植物や動物が生きているのも、その本来の生命的根源はこの太陽です。太陽はもの凄い火のかたまりである。原子的なものが絶えざる爆発現象を起こしている。それが実は生命の元である。

「お前たちの信仰は生ぬるい。そんなものは吐き出してしまうぞ。熱いか冷たいかのどっちかだ」

と、黙示録の中にも書いてある。

火性と水性ですな。おもしろいことに、神の霊は火と例えられ、水と例えられる。これは熱いか冷たいか。夏はみんな喉が渇くと、冷たい水を非常に飲みたがる。そして息を吹き返したようなことになる。要するに生ぬるくてはどうにもならんというわけです。その火性、水性なんです。この場合は火性でけっこうですが。この火性が即ち、ここにハッキリと現われた。

こういう記事があるので、

「どうもキリストはちょっと――ずいぶんお釈迦さんとは違って、お釈迦さんは大慈大悲で、そういうことはなさらない――どうもキリスト教というやつは烈しくて困る」

なんて思うひともあるかもしれませんが。本当の生命の世界は、そういった火とか水とかいったようなもので表現したい消息を持っているわけです。

新しい方もいらっしゃるので、ちょっと申し上げておきますが、聖書は、

「どういう教えが書いてあるだろうか」

と、その教えというものをかき込んで解ろうなんていう、そんな考えはいりません。私はこの「キリスト教」というのは嫌いなんだ。いつも言っているとおり、これはキリストの道である。

「日本人は道の民である」

と申し上げているとおり。『曠愛新書』第6号にも「キリスト道」なんてことを書いてある。しかも、聖書はドラマである。劇である。こんな面白い本はないのに、どうしてこの聖書をみんな棚上げにして読まないかと。聖書は「聖」なんて書いてあるものだから、みんな懼(おそ)れ畏(かし)こんで棚の上に乗っけてしまって、拝んだりする。聖書を拝むことは、キリストは要求していらっしゃらない。これはドラマでありますので、一番大事なのは自分自身がこのドラマの中に入って行くこと。

今日は非常にドラマチックな場面です。ドラマ中のドラマです。その中に自分を置いて、キリストのこの烈しい行動に――キリストの言葉はみんな烈しいですよ、質的には――どんなに優しいことを言っておられても、質的にはみんなその奥には火のごとき、また真清水のごとき性格を持っている。これが普通の次元に下ろされて、水を割られてしまって、「どうだ、こうだ」と解釈なんかやっているから、いつまでたってもこのキリスト教が本ものにならない。私なんかこういうところにでっくわすと、大変うれしい。

●過越の祭

今度はヨハネ伝に帰りましょう。ヨハネ伝2章12節、

12 **この後イエス及びその母・兄弟・弟子たちカペナウムに下りて、そこに数**

日留りたり。

カペナウムはガリラヤ湖の北の方です。

13 斯てユダヤ人の過越の祭ちかづきたれば、イエス、エルサレムに上り給う。

過越の祭というと、みんな東西南北から何万人と集まってくるわけです。今でもやはり、過越の祝いとなれば、大勢のユダヤ人が方々から集まってくる。過越の祝いのあとは、キリスト教の復活祭がくるから、ユダヤ教徒とクリスチャンで大変ですよ。まぁ、クリスチャンはユダヤ教徒みたいに、あるいはフイフイ教みたいにメッカを礼拝したりメッカに巡礼するように、集まってくることはしませんけれども。キリスト教徒にとっては、復活祭はどこであったって一向に差し支えない。ユダヤ人にとってはやはりエルサレム神殿中心の宗教ですから、あいかわらずそこに来てというわけです。

「過越」（ペサッハ）のことは出エジプト記12章3節から書いてある。

「3 汝等イスラエルの全会衆に告げて言うべし。此月の

即ち、「アビブの月」の、今でいうと大体3月から4月です。

十日に家の父たる者おのおの羔羊を取るべし、4 もし家族少くして其羔羊を尽くすことあたわずばその家の隣なる人とともに人の数にしたがいて之を取るべし。各人の食う所にしたがいて汝等羔羊を計るべし。5 汝ら羔羊は疵なき当歳の牡なるべし。汝等綿羊あるいは山羊の中よりこれを取るべし。6 而して此月の十四日まで之を守りおきイスラエルの会衆みな薄暮に之を屠り、7 その血をとりて其之を食う家の両旁の柱と鴨居に塗るべし。8 而して此夜その肉を火に焼きて食い又酵いれぬパンに苦菜をそえて食うべし。9 其を生にても水に煮ても食うなかれ、火に炙くべし。其頭と脛と臓腑とを皆くらえ。10 其を明朝まで残しおくなかれ、其明朝まで残れる者は火にて焼きつくすべし。11 なんじらかく此を食うべし即ち腰をひきからげ足に靴を穿き手に杖をとりて急ぎて之を食うべし、これエホバの逾越節なり。12 是夜われエジプトの国を巡りて人と畜とを論ずエジプトの国の中の長子たる者を尽く撃殺し又エジプトの諸の神に罰をこうむらせん。我はエホバなり。13 その血なんじらが居るところの家にありて汝等のために記号とならん。我血を見る時なんじらを逾越すべし又わがエジプトの国を撃つ時災なんじらに降りて滅ぼすことなかるべし。14 汝ら是日を記念えてエホバの節期となし世々これを祝うべし、汝等之を常例となして祝うべし。」（出エジプト記12・3～14）

●犠牲の血

こういう故事によっているわけです。即ち、犠牲の血が塗られていたら、これはイスラエル人の家だから過ぎ越して行く。それがない所はエジプト人だからエジプトの長子を殺

してしまう。これは復讐です。その前にイスラエルの長子が殺されたから、それに対する神の復讐という意味です。ユダヤ人というのは非常に復讐観念が強い。ドイツ人もそういうところがあるけれども。

「目には目を。歯には歯を。手には手を。足には足を」

と言って、損害賠償を必ずとる。罪に対しては罰が必ず来る。大体、「贖罪」、罪の贖いというのはそういうことです。神さまに対して申し訳ないことをしたことに対しては、どうしても罰が来る。しかし、その罪はほとんど死に価する罪だから、我々が神の罰を受ければ、我々は永遠に死なざるを得ないというわけです。しかし、この罪をどうか赦してくださいと言って、動物の犠牲で贖いをする。これがイスラエルの宗教なんです。毎年、大祭司が一年に一回それをやっている。そのことはヘブル書９章、10章に書いてある。ヘブライ人がいかにそういった犠牲の宗教を、そういった型を本ものとしてやっていたか。旧約は新約の型ですから。

けれども、そういうヘブライ人に対して、

「いや、そうじゃない。もうそれは過ぎた。キリストが私たちの罪を全部背負って、十字架にかかってそれを全部背負ってしまったから、もう無罪放免だ。罰はキリストが全部受けてしまった」

と言って、旧約の宗教の型を本ものをもって――羔（こひつじ）は、動物の羊ではどうにもならんから――キリスト自身が即ち羔となり、キリスト自身が大祭司となって、それを全部仕上げた。旧約宗教は、全部アウフヘーベンしてしまった。全部それは満たされてしまった。キリストが満たしたということをハッキリ、ユダヤ人に告げ知らせているのがこのヘブル書です。ユダヤ人には特にそのことを言わなければわからないから、このヘブル書を書いたわけです。

ところが、このヘブル書をユダヤ人は今でもあいかわらず一向に受けとらない。ユダヤ人というのは、

「いや、キリストが贖罪したのではない。メシヤは別にやって来る。この世の王者としてのメシヤがやって来る」

と、今でもそれを待ち望んで、この贖罪を受けとらない。ユダヤ人というのは頑（かたく）なだ。あいかわらず、モーセの律法でもって生きている。律法を一生懸命で守って、それで救いの世界に入ろうとしている。

そういうユダヤ人の宗教のひとつのまた間違った現われがここに出てきたから、そこでイエスはそれをひっくり返そうというわけで、両替屋の台を全部ひっくり返してしまった。これは旧約の宗教をひっくり返すような気持です。

13 **斯（かく）てユダヤ人の過越（すぎこし）の祭ちかづきたれば、イエス、エルサレムに上り給う。**

やはりイエスもとにかくユダヤ人ですから、その宗教を守ろうと、一応その祭にやって来た。

14 **宮の内に牛・羊・鴿を売るもの、両替する者の坐するを見て、**

なぜ両替するかというと、過越の祝いのときにお賽銭やなにかをあげるでしょ、日本と同じように。当時は普通の売買ではローマの貨幣を使っていたのが、しかし、こと宗教のことや神殿に関するかぎりは、お祭の時にはユダヤの貨幣を使わなければならない。そこで、両替屋でローマの貨幣をユダヤの貨幣に替えなければ、お祭に出かけていくわけにはいかないということなんです。しかも、羊や牛というのは、これは犠牲にするために買うわけです。あいかわらず、犠牲の宗教をそこでやる。しかもこの祭の際にやれば大いに売れるから、商売気を出してこの時に宗教商売屋がわんさと押しかけて来るわけです。

●永遠の贖罪を終えた

ヘブル書10章をちょっと見ましょう。

「1**それ律法は来らんとする善き事の影にして真の形にあらねば、年毎にたえず献ぐる同じ犠牲にて、神にきたる者を何時までも全うすることを得ざるなり。**

即ち、モーセの律法によって毎年そういった贖罪的なことをやってみても、これはキリストの贖罪のただ影であり型に過ぎない。それをキリストは完全に自分が引き受けて全うしたのだから、そんなことをいくらしたってどうにもならんと。

2**もし之を得ば、礼拝をなす者、一たび潔められて復心に罪を憶えねば、献ぐることを止めしならん。**

それでいいなら、もうそれで一回で終るではないか。ところが、一回で終らないで、何回も繰り返しているではないかと。

3**然れど犠牲によりて、年ごとに罪を憶ゆるなり。**4**これ牡牛と山羊との血は罪を除くこと能わざるに因る。**」（ヘブル10・1～4）

もうハッキリ言っている。そんなものはどうにもならん。ユダヤ教は、もうそういうことはよしたらよかろうと。そういった型は要するにキリストへのひとつの預言であったに過ぎないので、キリストが贖罪をしたらもはや要らんと。そのことはこの９章のところに書いてある。

「12**山羊と犢との血を用いず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、永遠の贖罪を終えたまえり。**」（ヘブル９・12）

と。「一たび至聖所に入りて」ということはもちろん比喩的に言っているので、この場合の「至聖所」とは十字架のことです。即ち、十字架に一たびかかって、キリストは贖罪の大業を終えた。

我々は自分の罪をどうにもすることはできない。「罪」というのは神に背いている事態を「罪」という。この悪いこと、この悪い考えというのは罪の枝葉にすぎない。罪とは神との

関係が切れていることを罪という。自己中心であることを罪という。神中心ではないこと。即ち、天動説をやっているのが罪なんだ。ところが、太陽の周りを地球が回っている。神さまの周りを回っている。神さまに引っ張り回されているということがわかって、その関係が本当についてきたらば、その関係は神中心、太陽中心で、これを「義」という。自己中心で太陽が回っているなんて思っているのは、これは「罪」なんです。普通の人間はみなこれです。もうこれは非常に大事なことです。ラテン語の「宗教」（レリギオン）というのは「再び結ぶ」（レリガーレ）という字で「再結」という意味なんです。宗教という字は実は、「結び返し」という意味です。結び返しをしなくてはいかん。

●妬みの神

14 **宮の内に牛・羊・鴿を売るもの、両替する者の坐するを見て、**

これは神殿の前の方の庭です。神殿の内側には入れない。

15 **縄を鞭につくり、羊をも牛をもみな宮より逐い出し、両替する者の金を散し、その台を倒し、**

キリストはまず、有無を言わせず、乱暴なことをしたものだな。相手は何十人だか何百人だか知らないけれども、イエスは一人ですよ。「なにしやがるんだ」なんてなわけで、ヤクザなんかがすぐかかって来るわけです。ところが、これがかかれない。

16 **鴿をうる者に言い給う『これらの物を此処より取り去れ、わが父の家を商売の家とすな』**

鳩はかわいい動物だから、これをひっくり返すことはしない。キリストはそこはちゃんとわきまえている。牛だの羊の方は構わないけれども、鳩は霊鳥ですから。平和の象徴でもあるし、聖霊の象徴でもある。鳩というのは東西同じだね、みんな尊ぶ。だから、「これは持っていきなさい」と。

17 **弟子たち『なんじの家をおもう熱心われを食わん』と録されたるを憶い出せり。**

これは、「食らわん」と言うよりも、「食らえり」と完了で言った方がいい。詩篇69篇9節に、

「9 **そはなんじの家をおもう熱心われをくらい汝をそしるものの謗われにおよべり**」（詩篇69・9）

とある。ヘブライ語では正に完了的な言い方で言っている。七十人訳のギリシア語聖書だと、「食らわん」という形になっている。この引用は七十人訳から来ているらしい。

「10 **われ涙をながして食をたち、わが霊魂をなげかすれば反てこれによりて謗をうく**」（詩篇69・10）

詩篇69篇はなかなか深刻な詩篇です。神の家を思う熱心が私を食らうと。この「熱心」という字は、「我は妬みの神なり」という、あの「妬み」と同じ字なんです。「妬み」というの

は人間の感情としては決して関心した感情ではない。そんなものは持たない方がもちろんいいに決まっているが、

「**神さまは妬みの神である**」

という不思議な言葉がある。それはサタンに対して人間の魂を哀惜したもう。サタンに盗られては大変だというので、そういうところから「妬みの神」という言葉があるわけです。熱愛している。他のものに盗られたら大変だ。偶像崇拝されたらいかんと。動物をあれしてどうのこうのなんていうのは、この事態も一種の偶像教ですから。

そういう「汝の家を思う熱心」。この熱心は、思う熱心という自分の熱心であると同時に、神の熱愛がかかってきている。悲願に対して霊願がかかっている。本願がかかっている。この本願がかかっていなければダメなんです、いくら悲願だけでは。これは仏教の世界でもそうです。

●神の怒

キリストがもの凄く怒った。怒り、憤り、聖憤という。「神の怒」というのをまた聖書でひとつのテーマとして研究してもおもしろい。たくさん出てきますから。少しあげてみようかな。出エジプト記４章10節から、

「10 **モーセ、エホバにいいけるは、わが主よ我は素言辞に敏き人にあらず、汝が僕に語りたまえるに及びても猶しかり。我は口重く舌重き者なり。**

私は口重き者でとてもダメですと、またこれがしり込みしたわけだな。

11 **エホバかれにいいたまいけるは人の口を造る者は誰なるや。唖者聾者目明者瞽者などを造る者は誰なるや。我エホバなるにあらずや。12 然れば往けよ、我なんじの口にありて汝の言うべきことを教えん。**」

「私がお前の口にあって言うことを教えている」

ということはもちろん、

「私の霊がお前の中に入ってくる」

ということです。

「13 **モーセいいけるは、わが主よ願くは遣すべき者をつかわしたまえ。**

「いえ、ダメですから、どうぞ他の者を遣わしてください」と。

14 **是においてエホバ、モーセにむかいて怒を発していいたまいけるは、レビ人アロンは汝の兄弟なるにあらずや。我かれが言を善するを知る。**

なかなか雄弁家であることを知っていると。

また彼なんじに遇んとていで来たる。彼汝を見る時心に喜ばん。15 汝かれに語りて言をその口に授くべし。云々」（出エ４・10～15）

と。神さまは、

「私の命令をなんのかんのとしり込みしてはいかん」
と言って、神さまは時々怒る。神の「神命」という。
エレミヤもそうです。エレミヤ記1章にある。召命を受けた時に、
「私はまだ若いからとてもダメです」
と言ったら、
「我は幼少というなかれ。……われ汝と偕にありて汝を救うべければなり」（エレミヤ1・7～8）
と言われた。老若男女を問わない。神さまはその人を選んで何かをさせようとするときには、人間の側の能力なんてものは五十歩百歩でそんなものは問題でない。問題なのは、
「こちらの力とこちらの言を受けろ」
ということ。それを拒む者は神を拒むことになるというわけです。
「怒（いかり）」というのは、ことにローマ書に出ているからおもしろい。ローマ書1章18節に、
「18それ神の怒（いかり）は不義をもて真理を阻（はば）む人の、もろもろの不虔と不義とに対（むか）いて天より顕（あらわ）る」（ローマ1・18）
と。怒の神という。神の怒というのはただの感情ではない。必ず義をもって裏付けられている。不義、不虔に対して義をもって裏付けられている。「義」というのは、神さまの御意が即ち義であります。この義というのはいわゆる正義の義ではない。神さまの聖なる意志、聖意の内容全部を「義」と称す。それは同時に愛です。愛と義とは絶対に離すことはできない。そういう神の義が、神に背いている者、「不虔と不義」――また人間との関係をいい加減にしている者、それが即ち「不虔と不義」ですが――それに対して神の義は、怒として現われる。ローマ書2章5節にも、
「5なんじ頑固（かたくな）と悔改めぬ心とにより己のために神の怒を積みて、その正しき審判の顕るる怒の日に及ぶなり」（ローマ2・5）
と。即ち、怒と義と審判、これは離すことができない関係になっている。最後の審判というのは神の義が現われる。ミケランジェロがシスティナ礼拝堂に、キリストが手を振り上げている姿を――キリストの怒、羔の怒です――描いてます。正しいものが正しいものとして認められ、不義は不義として審かれていく。そういう道徳的世界秩序、歴史的な秩序というものは厳として存する。これを破る者に対しては神の怒が現われるということでもあります。そういう意味において義という、天地を貫いたところの、また歴史を貫いているところのこの一線、義という線、これに背く者はみな神の怒に触れるわけです。
キリストがこの場合に台をひっくり返すまでに怒られたということは、こと神に関するからです。神のことを、それを商売にしようが何にしようが――この場合は宗教的商売でしたけれども――要するに神のことが神のこととして尊ばれない事態に対しては、キリストの怒が発する。それが端的に現われているのがこの事態です。

「神殿は祈りの家であり神聖なる所である。その神殿を強盗の巣となし、商売の場となしているから、とんでもない」

というので、神のことに関してキリストが怒られた。

●神の為には狂えるが如く

日曜日の集会というものは、あなた方が命懸けでそれを守るだけの、

「聖日に対する熱心が我を食らえり」

という、それを持っていなければいかんですよ。ただ、

「日曜日だから、仕方がないけれども、行きましょう」

なんていうのは来ない方がいい。

「私は行かざるをえない」

と言って、皆さんが来るのでなくては。この集会の人はみんなそうだと私は思っていますが。ある時はどうしても、行かざるをえない気持はありながら、ことやむをえずして来れなくてたって、それはいいですよ。それまで破って来いなんて私は言ってません。とにかく、その心には、「行かざるをえない」ということでなくては。たとえば、お客さんがやって来た。

「今日はお客さんが来て、ちょっと行けなくなりました」

と電話をかけてくる人が時たまあるけれども、そんなのはダメです。そうすると、私は神の怒を発するから。

「何を言ってるか！」

と。たいていは怒りませんけれどもね、本当は私のはらわたの中では神の怒がある。ただそれを外に現さないだけのはなし。キリストなら現すよ。私はダメだからまだ現しませんけれども。そんなお客さんは集会に引っ張ってくればいい。あるいは、

「私は日曜は絶対にダメです」

と言う。ただいろいろ公のことや何かでどうしても他所へ行かなくてはならない。それは仕方がない。けれども、とにかく、できる限り日曜を守るということを第一にしなくては。律法にしたらダメですよ。律法にして守ったって、そんなものはひとつも本ものではない。日曜を守ることをひとつの律法にしたら、それはダメ。日曜を守るとは自分の天的な自由である。

やむにやまれずして動いていく。そういう天的必然を自由という。天的自然で動くような、「別の仕方ではできない」という、そういう守り方が本当の守り方である。私は独協大学の校歌にも、

「法（のり）を守りて自由あり」

と歌った。「法を守る」というのは、そういう霊的な法則においての法を内側から、法に即する、即法するところに自由ありという意味なんだ。

内村先生が、「まあちゃん」とかいう孫ができて、孫が可愛くてしょうがない。そして、誰かがちょっと冗談に、

「先生は神さまよりかまあちゃんの方が好きなようだが」

と言ったら、先生は色をなして、

「それはいかん。それは大変だ。もし私がそうなら、それはとんでもないことだ」

と言った。内村先生は正直な人だから、

「もし自分がそんな気持だったらとんでもないはなしだ」

と、何もその人に怒ったわけではないけれども、こと神のことに関しては内村先生の意識が非常に烈しく燃えたという意味で、私はひとから聞きましたけれども。

パウロの書簡にもどこかにそういうのがあったね。コリント後書5章13節に、

「13 **我等もし心狂えるならば、神の為なり、心慥(たしか)ならば、汝らの為なり**」（コリント後5・13）

とある。神の為には心が狂えるがごとくに、狂人のごとくにと。ニーチェというやつは哲学的真理のためにきちがいになってしまった。あれはちょっとキリスト教の取り損ないをしたけれども。「神の為には狂えりなり」ということ。

「神においては酒に酔えるごとくなり」

とは、エレミヤ記に出てくる。エレミヤ記23章9節、

「9 **預言者輩(たち)のために我心はわが衷に壊(やぶ)れわが骨は皆震う。**

この場合の「預言者」というのは偽りの預言者です。

且つエホバとその聖言(きよきことば)のためにわれは酔える人のごとく酒に勝たるる人のごとし」（エレミヤ23・9）

酒に勝たれた人のごとく、自分は神さまの御言に酔ってしまっていると言う。

神の為には狂えるが如くであるが、人に対してはちゃんと醒めているよと。キリストは、両替屋の台をひっくり返してしまったけれども、鳩を持っているやつには、

「まぁ、お前は鳩を取り去れ」

と、ちゃんと醒めている。キリストは決していわゆる狂信ではない。心の奥底では本当に燃えている。しかしながら、判断は決して誤らない。本当の御霊の世界は、知識と情と意志は、知情意というものはちゃんとバランスがとれて統括ができているような、そういうのが本当の御霊の世界です。それがバランスがとれなくなってしまっているようなのではダメです。しかしながら、ちょっと見ると狂えるが如くであるが、しかし、それはその時その時に一番適切な現われをしているんです。

この場合、キリストのこの力ある行動は実は、驚くべき神的な権威を持っている。だから、誰も手が出せない。腕力で押さえようとしても、その腕力で押さえようとする気持が出てこない。人たちがこの権威に打たれる。それは厳かな権威であって、神のことを冒瀆する

事態に対しては厳かな権威を持っている。皆さんも生活の中心に――どんなに抜けたような顔していたっていいですが――その奥にちゃんとキリストにおける御霊の権威がなくてはダメです。

●神殿を壊せ、三日で建てるぞ

18 **ここにユダヤ人こたえてイエスに言う『なんじ此等の事をなすからには、我らに何の徴を示すか』**

ということはどういうことかというと、何か異常なことをすると――即ち、神の権威を帯びている世界です――それならば、それを実証せよという。それが、「徴を現せ」ということなんです。コリント後書12章を見ると、ちゃんとパウロがそのことを言っている。

「11 **われ汝らに強いられて愚かになれり、我は汝らに誉めらるべかりしなり。我は数うるに足らぬ者なれども、何事にもかの大使徒たちに劣らざりしなり。**

「自分はキリストの直弟子ではないけれども、直弟子たちに決して劣りませんぞ」

と。

12 **我は徴と不思議と能力ある業とを行い、大いなる忍耐を用いて汝等のうちに使徒の徴をなせり**」（コリント後12・11～12）

「自分はキリストの使徒であるということに対してちゃんと実証しているんだ」

と。使徒行伝をご覧になってもそうですが、パウロが福音を宣べ伝えると同時に、彼はキリストの御霊によって霊的な業をちゃんとやっている。毒蛇が噛みついたって、彼は死なない。それだから、土人が驚いてしまって、

「**これは神の人だ**」

と言ってみんな拝んだ。

「**なぜ、私を拝むか**」

と。パウロはまた、病める者をいくらでも癒してしまった。ペテロもそうです。生れつきの跛者が立ってしまったりする。盲人が見えてしまったりする。これは事実、御霊の権威、御霊の力でそれが起きる。だから、

「何か徴を示すか。お前はすごい乱暴なことをしたが、その権威をひとつハッキリ現してくれ」

と。ユダヤ人は徴を求めるというのはこういうことなんです。

19 **答えて言い給う『なんじら此の宮をこぼて、われ三日の間に之を起こさん』**

昔の訳の方がいいですよ、「こぼたば」ではない。今の訳は何と書いてあるかな。

「**この神殿をこわしたら、私は三日のうちにこれを起こすであろう**」

口語訳は何か弱くてしょうがない。「こわすならば、建てるであろう」なんて、まるで仮定法でものを言っている。イエスがこんな時に仮定法でものを言ってやしませんよ。もとも

とキリストはアラミ語で語っている。

「神殿を壊せ、三日で建てるぞ」

と。ギリシア語はなるほど未来形ではあるけれども、この未来形は単なる未来ではなくて、意志を表わして、「これからこういうことをするぞ」という気持も出てくるわけです。未来形になっていると、何でも日本語で、「であろう」なんて訳されるから困る。これは心をとらえてないから、ただ文法に囚われているから、こんな訳し方をしている。

「この神殿を壊せ。そうしたら、三日のうちに建てるぞ」

と。三日以内に建ててしまう。この19節は極めて大事な節です。今日の中心はここになる。

「この宮をこぼて」という。「この宮」の「この」には、二通りの意味をキリストはかけたわけです。キリストは、

「神殿を強盗の巣とする」

と言って、神殿を非常に神聖視して、みんなひっくり返して追い出した。そうすると、キリストはいわゆる神殿宗教をそのまま肯定しているかと思うわけです。エルサレムを中心とした神殿宗教。ヨハネ伝４章を見ると、すぐそのことが分かります。キリストは神殿を祈りの家だから大事だと言う。けれども、神殿を手放しで、神殿そのものを神聖視するようなこととはちょっと角度が違う。矛盾しているようですが矛盾してない。

●無の教会

我々はこの会堂を建てましたけれども、もし、会堂を何か非常に神聖視して、この会堂がなければ礼拝ができないと、思うなら私は大きな間違いをしたことになる。そんなことをしているのではひとつもない。

「この会堂をぶっこわせ。けれども、これを三日で建てるぞ」

と。キリストは、46年もかかっているこの会堂をぶっこわせと言う。

20 **ユダヤ人いう『この宮を建つるには四十六年を経たり、なんじは三日のうちに之を起すか』**

と。あいかわらず、ドラマチックな問答がおもしろいですね。食い違っている。「この神殿」と言った時に、キリストは自分自身を指していると同時に、またこの神殿も指している。

「こんな神殿をぶっこわせ」

ということは、いいかえると、

「ユダヤ教はもうお終いだ。いわゆる今までのユダヤ教の指し示しているものを今、私は本当に建てるんだ」

ということです。ただ否定しているのではない。それは指し示していることは結構なんだ。祈りの家として、またその神殿の中で大祭司が一年に一回入って贖罪のことをやる。それは型としては結構です。型そのものをただ否定したってしょうがない。型を完全に実質を

もって満たすようにして、それを否定してしまう。その否定の仕方はいわゆる破壊的ではない。それを完全に満たす、成就する。成就した神殿、それは生ける神殿です。

「生ける神殿を私は建てるんだ」

と。こういう武蔵野道場なんてものは在ってもなくてもいい。ただ、ここで皆さんと大いにいろんなことをするのに便利だから、自ずから建っただけのはなしで、不便だって一向差し支えない。我々は建てたけれども、決してそれに執着しているのでも何でもない。そこが即ち、内村鑑三が「無教会」と言ったゆえんである。無教会というのは「無教会堂」ということなんだ。教会が無いことではない。教会堂は要らんということ。けれども、もし、「無教会」ということを私が言うならば、それは「無の教会」ということ。「無の」の「の」が大事なんだ。無の教会。本当の教会は無の教会。私は「無教会神学論」でそのことをちゃんと言ってます。無教会堂ということ。我々はこの会堂は、有れども無きに等し、無けれども有るに等し、という有無自在なんです。有るも無いもそんなものは自在だと。有無自在というような、そういう境地になければ、この相対的な現実で本当に生きることはできない。「無い」ということをもって執着したら、それは実は「無い」ということに執着しているところのひとつの「有る」という行き方になってしまう。有るも無いも、相対界は問題でない。有無自在の世界が本当の無であり、またそれが本当の有である。絶対無であり絶対有である。相対的な有無というやつはダメなんだ。

だから、痛快ですよ、「この宮をこぼて」というのは。46年間せっかく建てたかもしれないけれどもぶっこわせ、三日で建てるぞと。なんとキチガイみたいなことを言うやつかと思ったわけです。実際、その宮はこぼたれていい。しかし、三日目で立てられるところの宮は別な宮なんだ。これは生ける神殿です。

●私たちは神の生ける宮

20ユダヤ人いう『この宮を建つるには四十六年を経たり、なんじは三日のうちに之を起すか』21これはイエス己が体（からだ）の宮をさして言い給えるなり。

この場合の「体」というのは「ソーマ」という字で、この肉体のことです。この肉体の体の宮を指して言った。ということは、もうひとつ言いますと、「この宮をこぼて」ということは、

「私は神さまの宮でござるぞ。私を殺せ。十字架で殺してみろ。三日目には甦るぞ」

と。それとまたかかっているわけです。

「お前たちはやがて私を十字架にかけて殺すだろう。私という生きた神殿を殺すだろう。しかし、三日目には私は甦るぞ」

と。「であろう」ではない。「甦るぞ」ということだ。おもしろいことに、この「起こす」という字はギリシア語の「エゲイロー」という字ですが、これが「甦る」という字と「建てる」

という字は同じ字が使ってあるんです。22節の「甦る」という字と、この「建てる」という字は同じ字が使ってある。

即ち、「三日目に建てるぞ」は「三日で私は甦るぞ」ということ。金曜日に十字架にかかって、金、土、日と、三日目にキリストは日曜の朝に甦ってしまった。

22然れば死人の中より甦えり給いしのち、弟子たち斯く言い給いしことを憶(おも)い出して聖書とイエスの言い給いし言とを信じたり。

これは「信じた」のではないよ。やっとわかったというはなし。やっと受けとったということ。最初から弟子たちもこの言が解らない。お母さんも兄弟もみんな解らない。

パウロがそれをちゃんと言っている。コリント前書3章16節、

「16汝ら知らずや、汝らは神の宮にして神の御霊なんじらの中に住み給うを。

これは非常に大事な句です。神の御霊、聖霊がお前たちのうちに宿っているではないか。それが神の宮であるぞということです。「神の宮にして」というのは「神宮」ということ。我々は神の宮である、神宮である。明治神宮なんていうけれども、私たちは即ち神宮なんです。神の御霊が宿っているのは、これは私たちは神の生ける宮である。ここにパウロがハッキリ言っているとおり、

17人もし神の宮を毀(こぼ)たば神かれを毀ち給わん。それ神の宮は聖なり、汝らも亦かくの如し」（コリント前3・16～17）

お前たちは神の宮で聖なる者である。即ち、わがうちには至聖所がある。わが魂の存在のうちには至聖所がある。

●御霊が入ってきてこそ自由になる

このことはさっきのヘブル書にも書いてある。

「はばからずしてこの至聖所に入れ」

ということが書いてある。ヘブル書10章19節、

「19然れば兄弟よ、我らはイエスの血により、20その肉体たる幕を経て我らに開き給える新しき活ける路より憚(はばか)らずして至聖所に入ることを得」（ヘブル10・19～20）

十字架の贖罪によって、その死によって贖われたから。罪なき者が罪ある者の代わりとなって罪の処分を受けてしまったから、私たちは無罪放免で自由である。無罪放免で自由だが、この自由はまだ消極的な自由です。これが積極的な自由になるためには聖霊を宿さなくては。罪から解放されているという事態です。罪から解放されているから、解放されているところに内実が入ってくるのが御霊である。神の御霊が入ってきて、その自由は本当の自由になる。それが本当の自由です。

そのことは案外みんなうっかりしている。贖罪されたから自由になったと、それでお終

いのような顔しているけれども、それではまだ片手落ちなんで、御霊が入ってきてこそ本当の自由になる。

「**主は御霊にして、御霊のあるところに自由あり**」

とパウロが言っている。パウロさんはよく読まなければいかん。パウロさんの構造は素晴らしい構造ですから。御霊のあるところに即ち自由がある。聖霊があるところに本当の自由がある。罪に対して打ち勝つところの自由がある。また、本当の愛を行ずるところの自由がある。だから、愛と自由とは分けることができません。

何でも本当の世界は全部、力を持っている。力のないものはみんなウソッパチ。それは思われている世界にすぎない。信仰が、思われた信仰ではダメですよ。キリストの霊を宿したならば力が出てくる。祈りの世界はこのキリストの霊を受けとって、キリストと一体になることが祈りの目的であります。このお願い、かのお願いは祈りの枝葉にすぎないので、そんなことをいくら祈ったってダメです。

「われ汝のうちに、汝わがうちに」

という世界が祈りの一番大事な世界です。即ち、活ける神殿である。パウロがコリント前書6章17節で、

「[17]**主につく者は之と一つ霊となるなり。**

キリストにつく者は、キリストと密着する者は、キリストの中に入ってしまう者は、これと一つ霊となるなりと。

[18]**淫行を避けよ、人のおかす罪はみな身の外にあり、されど淫行をなす者は己が身を犯すなり。**[19]**汝らの身はその内にある、神より受けたる聖霊の宮にして汝らは己の者にあらざるを知らぬか。**[20]**汝らは価をもて買われたる者なり、然らばその身をもて神の栄光を顕せ。**」（コリント前6・17～20）

と。いろんな霊がある。そんな他の霊にとっつかれたら大変だ。十字架によって贖罪されたこの事態を受けとるかぎり、そこに賜るところの霊はキリストの霊ですから、何も心配は要らん。十字架抜きの霊は危ない。そんな神人合一をやったら、それは霊的傲慢になる。

●無私の召団

この贖いによって完全にぶっつぶれているんですから、

「もう参りました。私はどうにもなりません」

と。だから、無と言う。私が無い。無私なんだ。十字架によって私無き事態に入った。それだから、無私の無という――虚無ではない――無の現実、無の霊現なんです。自分というものが無くなっているところの霊現です。

だから、その霊現は、別な言葉でいえば、教会です。「教会」というのは、キリストに「選（よ）り出された者の群」のことをいう。教会堂ではない。ひとつの集まりの群を、霊的な意

味においてそれを教会という。藤井先生が「召団」と言った。「召されたる者の団体」「召団」という方が「エクレシア」という言葉にはふさわしい。召されたる者の団体なんです。それはもはや人間の自己というものから抜けて、救いの世界だから、無の召団です。けれども、召団だって、無召団ではないんだ。召団は厳としてある。しかし、その性格は、人間が全然、自己中心がなくなっているから無という。無私の召団ということです。無教会というのは本当は「無私の教会」ということなんだ。そこに会堂があろうが無かろうが、そんなことは問題ではない。会堂が無いことをもってよしとしたって、それはおかしなことだ。有ることをもってよしとしたって、それもおかしなことだ。そういうことですよ。

「教会堂は要らん、いつも会場を借りている。それだから正しい」

と。どっこい、そうはいかん。そういう相対的な世界を何か絶対的な角度にしようとしたら、それは間違いである。有るも無いも、そんなことは問題でない。そして、本当の無が本当の有である。至る所これ神殿である。何となれば、自分自身がまず神殿になっていなければ、「至る所これ神殿」ということは言えないわけです。

キリストがその神殿に行って、神殿を尊重するのは、神殿の中に入る者が神殿をして神殿たらしめるのであって、神殿があるから、自分が入ると何か神聖になるというわけではない。逆だよ。

「人の子は安息日に対して主たるなり」

と言っているね、キリストは。安息日をして安息日たらしめるものは、我々自身が安息日的なるものにそこでなっていなければダメなんだ。キリストの中に安らう。キリストの中に安らうということは、力を得るということですよ。なにか

「安息日に休息して、ボヤーッとしちゃうのが安息だ」

と思ったらいかん。この世のものから離れて神の世界に入れば、それは当然、神の霊的な力の中に入る。今、私たちはこれだけの集会をしていて、もう私は力の世界に入ってしまう。あなた方も聞きながらその中に入っているでしょ。それでなければつまらんはなしだ。それを私は「幕屋」と称する。テントです。我々は神の幕屋である。畳んでは張って前進してやまないところの幕屋である。この中は聖霊の空間なんだ。ユダヤ人が幕屋を張りながら進んで行ったように、我々の人生また歴史は幕屋を展開していくところの旅であります。

だから、壊すならば壊してみろと。キリストは、

「私は十字架で殺されても、どっこい三日目には甦ってやる。私は死ぬのは、なにもお前たちに殺されるのではない。私が十字架にかかって贖罪の大業を遂げなかったら、お前たちの罪をどうするのか」

というわけです。だから、キリストは、

「お前たちを罪から解放したら、今度はもの凄いものを入れてやる。そのためにはまず私が霊的な体をもって甦って、その聖霊をお前たちにくださないことには。

お前たちの自由の中に今度は――その無の中には悪霊が空き巣狙いで入ってくるから、悪霊に入らせないで――私が入っていくぞ」

ということ。クリスチャンで、聖霊を宿さないようなものはひとつもクリスチャンではない。

●我々は既にキリストの復活体

そういうわけで、

19 **答えて言い給う『なんじら此の宮をこぼて、われ三日の間に之を起さん』**

「私を十字架にかけろ。この神殿なる私を十字架にかけろ。三日目に私は甦るぞ」

と。そういうことがこの言葉の中に隠されている。

私はなぜ今日、題に「宮清め」と書かなかったかというと、「宮清め」なんて言ったってしょうがないんだ。普通は「宮清め」と言っているけれども。むしろ、

「神殿を毀（こぼ）て、三日目に建てるぞ」

このキリストの生まの言葉こそ我々がこのところで受けとるべき一番大事な句なんです。

「私を受けとる者は死んでも死なないぞ」

と、ヨハネ伝のもう少しあとに出てくる。そういう生命的な、本当の意味における霊的な宗教です。それから今のキリスト教も仏教も大きなズレをきたしているから、あなた方は目覚めたならば、自ら証し人、証人とならなかったらしょうがない。私が曠愛新書に「証言集」というのを書くのはそのわけです。あなた方が本当に受けとって、かくかくでござると証言しているものを、その意味において御名のため福音のために載せるのです。

だから、「宮清め」なんていう何か出来上がったような表現で、あなた方はこういうところを読んではダメです。我々自身が本当に宮清めを受けとるなら、それはいい。我々自身が本当にこの神殿を十字架によってぶっこわされる。生れつきの私というものは十字架によってぶっ壊された。そして、私はもう三日目に既に甦っている。

我々は既にキリストの復活体である。もう死んでも死なない生命がある。原子爆弾や水素爆弾が爆発しようが、そんなことで死にませんよ。肉体は飛び散ってわからなくなるかもしれないが、霊体を持った魂は絶対にそんなことでは飛び散らない。それだけの積極的な勝利の事態を日本人はもっと持つべきである。何を見ても、小説を見ても、劇を見ても、最後の押しが足りない。それを持っていないから。

バッハの「受難曲」なんかを皆が尊重するけれども、バッハが受難曲のあとでなぜ復活の事態をもっともの凄くあそこで歌わなかったか。曲にしなかったか。そこのところの弱さを、バッハといえども惜しいなと思う。そこへいくと、ヘンデルの「メサイヤ」の方がよっぽど力強い。

あなた方は扇風機にかかっているけれども、私は扇風機にかからなくても、キリストのそういった火の如き生命が来たから――

「心頭滅却すれば火もなお涼し」
と言うけれども――普通の火よりも、夏の暑さよりもすごいキリストの熱さが私の中に来ているから、さっきから涼しくてしょうがない。そういうことで、楽しい。

●御霊の権威

キリストの神を思う熱心が上からかかってきて、キリストのこの烈しい怒は愛すればこその怒である。だから、この義の奥にちゃんと愛がある。審判はただ審ききるための審判ではない。救わんための審判である。そういう事態がいわゆる宮清めの事態です。私たちはここで本当にこの世の勢力に対して、

「汝ら、この宮を毀て。殺すなら殺してみろ。私は死にはしないぞ」

と言うだけの力を普段から、キリストの生命を頂いたその権威をもって対するときに、相手はたじたじとなるわけだ。何かしらんけれども、あいつは本当の権威を持っているなと。それは御霊の権威であります。ただ聖書を解釈したり、そんなことをしている世界ではない。御言を本当に食らい、

「わが言は霊なり生命なり」

として受けとっている事態であります。それで、やっとあとから、

22 然れば死人の中より甦えり給いしのち、弟子たち斯く言い給いしことを憶い出して聖書とイエスの言い給いし言とを信じたり。

おそまきながら信じた。

23 過越のまつりの間、イエス、エルサレムに在すほどに、多くの人々その為し給える徴を見て御名を信じたり。24 然れどイエス己を彼らに任せ給わざりき。それは凡ての人を知り、25 また人の衷にある事を知りたまえば、人に就きて証する者を要せざる故なり。

キリストはちゃんと人の心の中が見えてしまう。何を思っているか見えてしまう。自分から十字架にかかる時までは、決してキリストはかからない。また、時が満ちれば、キリストは自ら進んで十字架についていかれる。

何といっても、私たちが福音書を読んで、その神の霊的な現実、本当の神の現実というものを受けとらなくては。また神の言がいかに底力を持った言であるか、行為であるかを受けとらなくては。ひとつも生ぬるいものはない。みな本当の底力を持っている。それが外側に優しく出ようが、烈しく出ようが、根源はみな火山のごときものである。また、滾々と湧き出でる清水のごとき、源泉のごときものである。

「源泉から水が湧き出でてお前たちは渇くことがないぞ」

というようなことは第４章の方でまた言っておられる。